
これって呪い？ ソアメルグスターの恐怖！

松宮星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これって呪い？ ゾアメルグスターの恐怖！

【Nコード】

N9655W

【作者名】

松宮星

【あらすじ】

スレイヤーズです！ NEXTです！ 『異界黙示録』の写本を求め旅をしていたリナインバーズは、とある町で、背筋も凍る恐ろしい事件に巻き込まれていた。それは彼女を狙う、もと王女マルチナの呪いから端を発したものだ。謎の神官ゼロスは言うのだが…。16話の後ぐらいの話です。

Aパート（前書き）

16話の後ぐらいの話なので、ゼロスはまだ獣神官と名乗っておらず、ガープ様がご健在なのであの魔法が発動しております。

Aパート

あたし、リナィンバース！

なあぜか、最近、天才美少女魔道士のあたしは、魔族に命を狙われている。なんで？ どうして？ WHY？ やっぱ、この美貌は罪？

実は、あたしには高位魔族さえ倒せちゃうスペシャルな切り札が二つもある！

さっすがリナちゃん！ パチパチ！……でも、両方とも未完成だし、とっておきのアレは危なすぎるのではつきし言って使いたくない。

こうなったら、魔族に対抗する他の手段を探すっきゃない！……で、ことで、あたしはお供ども（なんか文句ある？）を引き連れて『異^ク界黙示録』の写本を求めて旅してるんだけど……

恥ずかしいデュエット歌わされるわ、きぐるみ着なきやいけないわ、グラストラケットで親子ゲンカに巻き込まれるわで、ロクな事がない。

こんなんで大丈夫なんかな？

と、思ってたら、ふと訪れたごく平凡な街、その宿屋のメシ屋で

……

あたしに逆怨みしているもと王女マルチナのせいだ……

背筋も凍る恐ろしい事件に巻き込まれてしまったのだった。

「で？」

につこりと微笑みながら、あたしはマルチナに聞いた。

「なあーんで、こうなったのかなあ？ もちろん、説明してくれるわよね、マルチナあああ」

当然、最後の『マルチナ』にはめいっぱいドスをきかせて、構え

た掌の間に火炎球をためちゃったりなんかして聞いているんだけど。

「ひいひい」

目から涙をほとばしらせ、後ずさって逃げようとするマルチナ。

「フン！ おあいにくさま！ その先は壁、行き止まりよ！」

マルチナが壁にぶち当たるよりも前に、両手をすこゝし前に突き出してやった。

マルチナはアキヤキャキャわけわかない悲鳴をあげ、涙声で叫んだ。

「あたっ、あた、たくし、……あたくしだって、こんなコトになるとは思わなかったのよお！」

なにい！　なんだ、そのいいわけは！　わざとじゃなきゃ、何しでもいいって言うんか、あんたは！

許せん！　ファイアー・ボール火炎球、ぶっぱなす！

と、思った、まさに、その時。

「そうですよ。マルチナさんは、ガウリイさんをダシにリナさんを不幸のドン底に突き落とそうとしただけで、今の事態は想定外なんですよ」

あたしの左斜め後ろ……つまり、宿屋のメシ屋の隅っこ、その力ウンター席から、とことん明るい、のほほんとした声がかかった。

振り向くまでもない。

謎の神官ゼロス……。

いつものコトながら……いつの間に現われたのよ。ちょっと前までカウンターは無人大ったのに（店のオヤジでさえ、あたしの怒りに怯えて逃げ出したもんな……ちなみに、アメリカ達は居ない。マルチナとの戦いを邪魔できるのはコイツだけなわけだ）。

「リナさん、マルチナさんをそれ以上いぢめても、無駄ですよ」

「かばうの？」

「いえ、いえ。真実を申し上げているだけです。今回、マルチナさんの呪いは失敗してしまっただけです。それは、もう完璧に、ね。ですから、何でこうなったのかマルチナさんに説明できるはずがあり

ません」

「じゃあ、マルチナは無実ってわけ？」

「いやー、それが、そーでもないんですよ。呪いは失敗しても、呪いに拮抗する力、ううん、まあ、呪いにつきものの反動とでもいいますか、そっただけは完璧に働いてしまったんです」

「呪いに拮抗する力？」

「『人を不幸にする』の反対の力ですよ」

へっ？

不幸にするの反対ってコトは……

幸せ……？

これって、『幸せ』なわけえ？

これがあ！

「マルチナあああ！」

とりあえず、掌の中の火炎球を消滅させ、あたしは彼女の肩をわしっ！ と、つかんだ。

「今すぐ呪いとやらを解きなさい！ 早く！」

「むっ……無理！ 無理！ 無理よ！」

マルチナはブンブンとかぶりを振った。

「ゼロスさまがおっしゃったでしょ？ 呪いは失敗しちゃったの！ 解こうにも、解くものが無いのよ！」

「じゃあ、コレ！ あんたの責任でどうにかしなさい！」

あたしの背後を見てから、マルチナは途方に暮れたような顔をし、それから愛想笑いを浮かべた。

「いつ……いいんじゃない、そのまんまで。本音を言えば、まんざらでもないんでしょ、リナ？」

ぶちっ！

もぉ、ダメ！

堪忍袋の緒が切れたあ！

ファイアー・ボール
「火炎球」

「きや——！」

メシ屋の壁ごとマルチナを吹き飛ばした後、あたしはゼロスを睨んだ。

おちゃらけ神官は香茶のカップを手に（いつの間に出したのよ、それ）、カウンターでくつろいでいた。

「見てたんでしょ、ずっと、マルチナの悪だくみを」

「はあ、まあ、そうなりますかね」

「じゃああああ、説明してっ！」

「やあ、何か迫力ありますね——、リナさん」

あたしの凄みをきかせた声に怯えたフリをしつつ、いつもと同じ笑顔のままゼロスは語りだした。

「昨夜のことです。僕は月夜の散歩をしゃれこんでいたのですが、ふと気がつくと、路地裏から聞き覚えのある声があるじゃありませんか。それで、ちょっと覗いてみたんです。そしたら……」

ゼロスは口元を押さえ、クツクツと小さく笑った。

「ゾアメルグスター印のあやしい天幕の中、黒マントに瓶底メガネ、マスク着用のマルチナさんが、若いお嬢さんを相手にゾアメルグスターのペンダントを見せていたのです。いつものバイトかなーっと思ったのですが、どうも様子がおかしい。聞き耳をたててみると、こんなコトを言っていました」

「あなたは、昔、暴漢に襲われたところをある男に助けられました。金髪の背の高い逞しい男……名前はガウリイ・ガブリエフ、剣士です。とても強くてハンサムな男。あなたは一目で恋に堕ちました。お礼をしたいと言うと男は『今度、うまい手料理をつくってくれ』と言いました。『きみみたいな、かわい子ちゃんを助けられてラッキーだった』、『大きな胸だね』、『女はやっぱ胸だよ』、『ペチヤパイなんか、オーガ以下だね。生きてる価値もないよ』、『きみ

と寝たいな』……。けれども、男はすぐに町を立ち去ってしまったのです。あなたは、まだお礼をしていません。もう一度、会って男に怨み言を言って拗ねて甘えてもいいでしょう。なぜなら……男はこの町に戻っているのです。町外れの宿屋にいます。男の名前はガウリイ。ガブリエフ。明日の朝なら宿屋の食堂に居るでしょう。ガウリイ。ガブリエフです。会いに行きなさい」

「と、まあ、そんな風に女の子に囁いていました。そのうち、女の子はふらつと居なくなっただんです。が、じきに友人らしい女の子を連れて戻って来ました。その後から来た子も、又、とても女性らしい体型の方で……どの部分がどれくらい女性らしかったか説明しましょうか？」

「結構よ！ 話を続けて！」

「その新しい子は、『すごい占い師がいる』と騙されて連れて来られたようです。最初、マルチナさんは占いのまねごとをしました。が、そのうちとびつきりの恋占いがあると言って、ゾアメルグスタのペンダントを彼女の顔の前でゆつくりと動かしました……振り子の要領で、ね」

「つまり、催眠術をかけたってわけね」

「ピンポーン」それで、さっき僕が聞いたセリフを繰り返していました。僕が見た限り、四人の女の子に同じ暗示を与えていましたね」

「六人よ」

「へっ？」

「マルチナの催眠術に踊らされて、今朝、この食堂に現われたのは六人だったわ」

「へ——、そうなんですかじゃあ、ガウリイさんは、六人の丰满な胸の女の子に囲まれちゃったんですね。見覚えのない巨乳な子達に『きゃあ、ガウリ様、お会いしたかったわ』とか『今度こそ抱いて

ください』とか『手料理をご馳走しますわ』とか黄色い声をあげられてさぞ困ったでしょうね。見たかったなあ、水蜜桃の胸に囲まれたガウリイさん。あつ、もつとも、ガウリイさんの事だから、たとえ爆乳の方に本当に会っていたとしても覚えてませんよね、はっはっはっは」

と、明るく笑うゼロス……。

こいつ、胸だの、乳だの……

わざとあたしの怒りを煽っているな！ ふん！ ど——せ、あたしは……

「……で？ あんた、その時、なにしてたの？」

「はい？」

「マルチナの企みを知って、高みの見物と洒落こんでいたわけ？」

「とんでもありません」

心外だと言わんばかりに、ゼロスは身を乗り出した。

「マルチナさん、それは、もう真剣だったんですよ。女の子達がいなくなった後、しらじらと明け始めた空に向かって『リナイインバース！ 今日こそは、おまえの最後よ！ 今日、ガウリイはおまえへの愛を失う！ 後は途方に暮れたあのクラゲ男が、占い師に扮したあたくしのもとを訪れれば呪いは完成よ！ 愛する男を失い、不幸のどん底に堕ちればいいわ！』とおっしゃって高笑いをするマルチナさんを見た時には、本当、感服しました」

へっ？

「あなたへの怨みを晴らす為に、マルチナさん、完徹したんですよ。その後、一睡もしてません。あなたへの怨みを晴らす為だけに！

いやあ、なかなか出来ることはありませんよ」

……そおいえば、こいつ、マルチナのこと、褒めてたっけ。『復讐すると決めたら、テコでも動かない。手段も選ばない。その為にコツコツ、アルバイトまでする。その執念と意志の強さには、もう本当、敬服しちゃいます』とか何とか。

「だから、お手伝いをしてあげる事にしました」

をい！

「実は、ガウリイさんをマルチナさんの所まで案内したのは僕だったりして」

をい！　をい！

「宿屋の近くで待ってたんです。そしたら、まあ、見事にガウリイさんが僕の前まで吹っ飛ばされて来たじゃありませんか。リナさん、ガウ・フレア魔竜烈火砲使ったでしょ？　いけませんよ、空に向けてでも街中で大技を使っちゃ。ガウリイさん、少しコゲてましたよ」

「やかましい！　あんたもグルだったのね！」

ゼロスの胸倉をつかみあげ、あたしは叫んだ。

「責任の半分はあんたにある！　コレ、どうにかしなさいよ、ゼロス！」

あたしに胸倉をつかまれたまま、さして苦しくもなさそうにゼロスは言った。

「違います、僕の責任は三分の一程度ですよ」

「三分の一？」

「残る三分の一の責任は、リナさんにあります」

えっ？

「リナさんがガウリイさんを信じて、巨乳の女性達を追い払えば良かったんです。そうすれば『あなたに嫌われた』とガウリイさんが落ち込む事もなく、悩みを何でも解決しちゃうって評判の占い師、つまりマルチナさんのもとへ相談に訪れる事もなかったはずですから」

「でっ、……でも、」

「およそ彼のキャラクターに合っていないじゃないですか、軟派な剣士なんて」

……それと同じようなコトは、あの時はこの場に居たアメリカやゼルにも言われた。

『なにかの間違いですよ、絶対！』

『あれほどの人数を相手にできるほど、マメな男ではない。第一、

女達が口にした齒の浮くようなセリフ、あのガウリイが言えると思うのか?』……と。

でも、あたしは聞く耳をもたなかった。

だって、知ってるから……。

そのうち二人は、ずっと朝食を食べ続けるあたしに呆れ、顔を見合わせ街に出て行った。多分、ガウリイを探しに……そして、まだ戻って来ない。

「何故、ガウリイさんを叩き出したんですか? マルチナさんの、みえみえの嘘っぱい畏に、どうして簡単にはまっただんです?」

ゼロスはいつもと同じ顔で、しかし、（首が苦しいだろうに）どこか嬉しそうな感じで尋ねた。

「どうして、騙されちゃったんです?」

だって、それは……

知ってるから……

ガウリイが、本当は、どんな奴か……。

ガウリイと初めて会ったのは森の中だった。

あたしは、いつもの盗賊いぢめの帰りで、生き残った下っぱどもに周りを囲まれていた。その数、十と、ちよつと。ザコもザコ。攻撃魔法一発で吹き飛ばしてやろうと思ったその時……

現われたのだ、ガウリイが。美少女のピンチに現われる白馬の王子様のように。

だが、ガウリイは、バツタ、バツタと悪漢どもを倒した後、あたしに向き合い、こう言ったのだ……

『……なんだ……子供か（中略）、もうちよつといい女だと思ったんだが（中略）ドングリ目のペチャパイのガキじゃないか……』。

今でこそ、一家に一匹は居そうな『人畜無害な脳みそヨーグルト

男』で通っている。が、ガウリーのほんとーの正体は、女の子からの『あたしをタ・ベ・テ』のお礼の為に戦う、とことんナンパ剣士なのだ。

しかも、悪趣味の！

ガウリーには、あたしの魅力は、全然、通じなかった。愛くるしい顔、清楚かつ小柄で華奢な体つき、あたし……可憐な美少女の、このあたしをつかまえてガキい？ 絶対、あいつ、グラマスな色気虫しか女と認めない悪趣味色事師よ！

だから……あの女の子達に囲まれたガウリーを見た時、畏だなんて、全然、思わなかった。

ついに、ガウリーの本性を見たわ！ と、思ってたチ切れちゃって……。それで、魔竜^{ガーヴ・フレア}烈火砲使ったんだろーな……。よく覚えてないけど。

街中の大技は、うん、ちょびつとマズかったかも。

でも、あたしは悪くない！

今だって、竜破斬^{ドラゲ・スレイブ}唱えたいのを必死で我慢してるんだからあ！

あああああ、もう！

ぶっぱなしたい！

Aパート（後書き）

アイキャッチ（みなさまのお心に一枚絵をお浮かべください）♪

CMの後はBパートをお楽しみください！

CM（前書き）

CMです。

CM

十年の時を経て……あたしは帰ってきたあ！

スレイヤーズ・極楽パツク！

* これって呪い？ ゾアメルグスターの恐怖！ *

スレイヤーズです！ NEXTです！ 『異界黙示録』の写本を求め旅をしていたリナインバースは、とある町で、背筋も凍る恐ろしい事件に巻き込まれていた。それは彼女を狙う、もと王女マルチナの呪いから端を発したものだ。謎の神官ゼロスは言うのだが……。16話の後ぐらいの話です。一人称（リナ）。

* 結婚狂奏曲 *

スレイヤーズです！ TRYまでの設定で作った話です！ 俺の名はゼルガデイス。残酷な魔剣士と恐れられ、醜い異形を蔑まれる、孤独な永遠の旅人……だったはずなのだが、セイルーンに着いた俺は何故か結婚騒動に巻き込まれた。しかも、相手は……アメリカ？ 2003年8月に友人に一度、同人誌で発行していただいてます。一人称（ゼル）。

* 真夏の匂い *

スレイヤーズです！ 原作です！ 十四巻「セレンティアの憎悪」のルークとミリーナの描かれなかったシーン。ネタバレありのシリ阿斯なので取り扱い注意。これも友人がコピー誌で出してくださいました。一人称（ミリーナ）。

の三本立て！ 十年ぐらい前に書いた話に手を加え、今、甦えらせる！

にじファンで、九月二十三日から毎日更新予定！

乞うご期待！（ご覧いただけると嬉しいです）

CM（後書き）

CMでした

Bパート

「今回のマルチナさんの呪いは」

ニコニコ笑顔で、ゼロスは店の中をうろついている。

て、しまった！ 逃げられた！ ゼロスの胸倉をつかんでいた手は、今、宙をつかんでいる。

「ささやかな野望の成就を助け、その代償として犠牲を求めるタイプの呪いです。多分、『魔族との契約』の模倣でしょう。王にしてやるから赤子を千人捧げるだの、人外の知識を与える代わりに若さを奪うとか、昔からあるでしょ、魔族の、そおいう、おとぎ話」

おとぎ話か、それ？

「占い師にバケたマルチナさんは、相談に来たガウリイさんに、騒動の元凶を教え、その元凶を取り除く方法を教えました」

「騒動の元凶？ なに、それ？」

「無知ですよ」

「無知？」

「原因は無知でしょ？ 女の子達に人違いだつて言えれば騒動は静まったはずですから。で、マルチナさんは、ガウリイさんに欠けている性質、昔のことを覚えていられる記憶力、論理的な思考、一般常識、その他もろもろ知恵に関するものを与えようと言いました」

「マルチナが？」

魔力のカケラもない、もと王女つてだけの彼女に、そんな能力あるはずもない。信奉している魔神ゾアメルグスターにしても、彼女の創作だし。

それに、精神を攻撃して破壊する魔法なら聞いたことあるけど、その逆つてのは……無理だ。

知能のキャパシティーの少ない者（つまり、バカ）に知識を伝達しても賢くはならない。知識を活用できる理性的訓練が積まれていないからだ。

ゼロスは朗らかに笑った。

「いやあ、凄いですよね、マルチナさん。リナさんへの怨念だけで、
又も新しい呪いを完成させちゃったんですから」

「その呪い、ほんとおに完成してたの？」

「さあ？ でも、少なくともマルチナさんは完成したと信じていました。
でなきゃ、罫なんて仕掛けませんよ」

「まあ、そうね。それで、マルチナはガウリイにどんな代償を求めたの？」

「それは、もちろん、リナさんへの思いです」

ゼロスはコホンと咳払いをした。

「『あ』で始まって、『い』で終わる、二文字のアレです」

あい……

『愛』という単語を区切つても言ったのが嫌なのか、ゼロス是不快そうに眉をしかめた。でも、今は嬉しそうにニコニコしている。

「やな奴！ そんなに嬉しいか、おまえ！ 砂を吐いているあたしが！」

「マルチナさんは、直接はなにがほしいとは言いませんでした。『激しい感情の一部が代償には必要です。でも、それを失った後でも、今までと同じように泣いたり笑ったりできます。失っても困らない感情を捧げるだけで、あなたは賢くなれるのよ。見に覚えの無い女性の問題で悩まされることはなくなるし、クラゲ頭だの脳スライムだののしられる事もなくなります。さあ、契約しましょう。ゾアメルグスター様のペンダントを握って賢くなりたいと思うだけで良いのです。たちまち、あなたは天才よ』と、まあ、こんな感じに」

「キタナイ……マルチナの奴う、そんな言い方じゃ、おバカのガウリイに通じるわけじゃないじゃない。」

「でも、その呪い、失敗したんでしょ？」

「はい、もう完璧に」

ゼロスはポリポリと頬を掻いた。

「ガウリイさんが、その申し出を拒否しましたから」

えっ？

「なんで？」

『賢くなれる』チャンスをふいにした？ 賢くなれば、あたしにク
ラゲよばわりされることも、どつかれることもなくなるのに……

「病気でもないのに、親からもらった健康な体をいじくられるのは
嫌だとか。この場合の『体』は全身のことで、頭やその中身も含ま
れるそうです」

はぁ……そう……。

なんというか……ガウリイらしい。

「マルチナさんは『バカのまんまじゃ、又、女性問題が起きるわ』、
『バカすぎると、いつか、リナに見捨てられるわよ』とか言って、
決心を変えさせようと頑張ったのですが」

「ダメだったのね？」

「はい。ガウリイさん、言っていましたよ、『でも、オレがこうなの
は生まれつきで、リナだって、それを承知でつきあってくれてるん
だし。見捨てる気なら、とっくの昔にしてるんじゃないか？ 今ま
で、ずっと、一緒だったんだ、これからだってそうさ』って」

それって……

ポツ。

やだっ！ やだっ！ やだっ！

ひいひいゝ頬が熱い！

げっ！ ゼロス！ そんな無意味ににこやかな顔で見るなあ！

あっち向けっ！

「ガウリイさんがそう言った途端、呪い用のゾアメルグスターのペ
ンダントはまばゆく光り、パリーンと割れちゃいました。呪いの失
敗……それを合図に、ガウリイさん、猛烈なスピードで走り出した

んです。リナさんの居る、宿屋の食堂に向かつてね。マルチナさんはびっくりして後を追ってここまで来て……リナさんにぶつ飛ばされてしまったわけです」

なるほど……

話はようやくわかったわ。

でも……

デエエエい！ 背中が熱い！

顎のあたりで両手を揃える、ぶりっこポーズで、ゼロスが首を傾げる。

「良かったですねえ、リナさん」

「やかましいわ！」

蹴り飛ばしてやるうとあげた右足は、むなしく空を切った。くっそお！ あやしげな術で、又、逃げたな！

ゼロスの姿はメシ屋から消えていた。

（ああ、そう、そう、言い忘れていました）

姿は見えなくとも、声は聞こえる。どこからともなくゼロスの声がする。

（マルチナさんの所へ行く前、道々、伺ったのですが、ガウリイさん、自信なさそうに言っていました、『あの女の子たち、たぶん、オレ、ほんとに、助けたんだろうな。いや、顔とか全然、覚えなし、胸がどうのって話は言った覚えはないんだが……。リナに会う前、女の子があぶないといや、駆けつけてたからな』と）

なっ……なにい！

やっぱ、そうだったの、そういう奴だったのねえ！

スケコマシ！

女の敵！

ボカ、ボカ！

（何でも、シルフィールさんって方を助けた時からだそうですよ）
シルフィール……サイラーグの巫女の彼女と再会した時のガウリイは、確かに妙な雰囲気だった。

くうううう！

ボカ、ボカ！

（シルフィールさん、お料理がとおってもお上手だとか。だものでその後、ガウリイさん、不純な動機で女の子を助けるようになったんだそうです）

不純って、不純って、不純って……うぬぬぬ。

（つまり、『女の子を助けて手料理をご馳走してもらおう』です）
へっ？

（お店では味わえない家庭的な味で、しかもタダ！ 大食漢のガウリイさんは、それは、もう一生懸命、ピンチの女の子を捜したそうですよ）

それって……

（でも、小さな女の子は駄目だそうです。小さな子の手料理をご馳走になった時、タワシやまな板の一部だの食べられないモノが混ざっていたそうで……残しては悪いので、全部、平らげたそうです）
残せよ、タワシやまな板は。

（ピンチとみれば、子供や貧しそうな老人男性でも助けたそうです）
が、助けてもご飯にありつけなさそうなので、いつもガツカリしたそうですよ）

……そういうコト。初めて、あたしに会った時、あからさまにがっかりしたのは……

食事でありつけそうもなかったから？

このお、脳ミジンコの、胃袋魔神があ！

いつの間にかゼロスの声も聞こえなくなった。

もしかしたら、どこかに隠れているのかもしれないけど、気配は完全に消えている。

メシ屋に残っているのは、あたしと……

あたしと、ガウリイ……。

実は、さっきからずっと、ガウリイはあたしと一緒に居る。と、
いうか、背中にはりついている。

「リナ、愛している。リナ、愛している。リナ、愛している」

ボギヤブラリーの少ない彼は、質より量とばかりに、さつきからずくと、あたしの頭の上で同じセリフをつぶやいている。あたしがマルチナに制裁を加えている時も、ゼロスの胸倉をつかんだ時もずくと。うつとーしいこと、この上ない。

平たく言えば、ガウリイは……後ろからあたしを抱きしめて、愛の言葉とやらをあたしの頭の上で囁き続けているのだ。

ボカボカ肘鉄くれようが、ドンドコ足を踏もうが、離れないんだ、これが。攻撃魔法を使ったら、あたしも無事じゃすまないし。

どうしろつてのよ、このオンブおばけ！

「リナ、愛している。リナ、愛している。リナ、愛している」

『愛』を消滅させる呪いが失敗して、逆に『愛』を増幅されて、こ
うなっちゃったのよね。

増幅されてこうなっただってコトは、ガウリイは、そのモトになっ
ているもの……つまり、えっと、その、あたしへの『愛』ってヤツ
を……少なくとも、ちびつとは持つてるってコトで……。

ひいひいこっばずかしい！

いや、違う！ どーせ、こいつの『愛』は『ちいさきものはみな
かわいい』程度の博愛でした、なうんてオチよ！ イヌやネコやリ
スやニヤラニヤラやメダカやカメやカニやイワシやナマコやホタテ
や……あれ？ 何故、海産物に？ まあ、ともかく、その程度のモ
ノへの愛情と変わらないに決まってる！

でも、こいつに抱きつかれている今の状況は……

誰がどう見たって……

ラヴラヴ……

マズい！ 何とかしないと！

と、思ってたなら……エルフ並に優れているあたしの耳に、聞き覚えのある靴音が響いてきた。

これはっ！

「リナさあ——ん」

あの軽快な靴音はアメリカ！

もしかして、もしかして、靴音を立てないように歩くゼルも一緒
お？

「おい、リナ。ガウリイ、何処にも居ないぞ」

て、やっぱり、ひいえエエエ！　ゼルの声までする。

逃げなきゃ、二人が食堂に入って来る前に！

「リナ、愛している。リナ、愛している。リナ、愛している」

「ええええい、うっとうしい、このクラゲ！」

レイ・ウイング

翔封界を唱えようとした、あたし。あたしの目が、ふとメシ屋の
出入口を向いた時……そこには！

「リナさ……ん？」

「……………」

硬直しているアメリカとゼルガデイスが居た。

一瞬、時が凍りつく。

いやああああ！

メガ・ブランド
「爆裂陣！」

あたしが放った魔法はアメリカ達を吹き飛ばすだけに留まらず、
崩壊しかけていた店の壁も天井もぶち壊したのは言うまでもない……

お願い！

誰か、背中のコレ、取ってよおっつ！

＊ おまけ ＊

「と、まあ、そういうわけなのよ。わかった？」

街道を歩きながら、あたしは、背中のオンブおばけについてアメリカ達に説明した。

「なーんだ、そうだったんですか」

アメリカは心の底からがっかりした風につぶやいた。って、なに期待してたのよ、あんた！

ゼルはゼルでそっぽを向いて歩いている。メガ・ブランド爆裂陣で吹き飛ばしたコト、まだ根に持っているのだ。チツ！ あいかわらず、心の狭いやツ。

「リナ、愛している。リナ、愛している。リナ、愛している」

ガウリイは、あたしの背後から抱きつきながら歩いている。あたしの行く後をそのまんまついて来てるのだ。そんなガウリイを横目で見つっ、ゼルがためいきをつく。

「……どうにかせんとな」

……ゼル！

「ええ——っ！ 呪い、解いちゃうんですか？ せつかく、いい雰囲気なのに」

もったいないと言わんばかりに、アメリカが叫ぶ。

あのなあ……なら、あんた、代わりにとり憑かれてよ、このオンブおばけに！

「いつ魔族の襲撃があるのかわからんだ。リナもガウリイも、これでは戦力にならん」

あつ、そ——……。そーいうコト。珍しくゼルが優しいと思ったら、そーいうワケ。別に、いいんだけど。ブチブチ。

「でも、どうやって、コレをはがすの？ 殴ろっが蹴ろっが離れないのよ」

「物理衝撃では駄目だろう。マルチナの呪いは精神的呪縛の一種だ。殴るより、精神面に揺さぶりをかける方がいい」

はーっ、なるほど。

「じゃあ、崩^{ラ・ティルト}霊裂なんかどうです？」

明るく容赦のないコトを言うアメリカ。

「いや、魔族じゃないんだから、それは効果は……」

と、言葉を濁すゼルガデイス。

精神面に強い揺さぶりねえ……

……うーん……

よし、ひらめいた！

あたしは、保護欲をかきたてるよーな、とびつきり可愛いプリブリの裏声を出した。

「ガぁウリイ、あたしねー、今朝ねー、食堂のメニュー、端から端まで三回も制覇したのお」

「リナ、愛している。リナ、愛している。リナ、愛している」

「支払いは、とあぜん、ガウリイの財布からよお。愛するあたしの為なら、それぐらい当然よねえ」

「リナ、愛している。リナ、愛している。リナ、愛している」

「ついでに言つとあ、あたしい、宿屋の食堂、壊しちゃったでしょ。だからね、弁償してきたの、あなたのお財布でえ」

「リナ、愛してい……る。リナ……愛している。リナ……」

「ごめんなさい。あなたのお財布、もうスツカラカーンなお。

つまりい、食費が無くなっちゃったのよお。もうパン一本買えないわぁ」

「リ……ナ、愛……してい……る。リナ……愛し……」

「ガウリイ、今日から、一生、あんだ、ごはん抜きよー！」

「リ……ナ、愛……し……て……？　つて、ええ~~~~~っ！
おい、ごはん抜き？　ウソだろ！」

「愛するあたしの為ならば、ごはん抜き、無報酬で、ずーっと、ずーっと尽くしてくれるわよねー。あつ、それから、それから光の剣もプレゼントしてくれるんでしょ？」

「バカ言え！　これ、家宝なんだぞ！」

「でもって、毎日、毎日、ダイヤとかルビーとかサファイアとか金塊とかあ、馬車一杯プレゼントしてくれてえ、おうちはもちろん、豪邸……ううん、お城ぐらいじゃなきゃ駄目よねえ」
「なっ、なに、言ってるんだ、リナ……？」

「ガウリイさん、もう正氣に戻ってますよね？」
と、アメリカ。

知ってるわよ、知ってていぢめてるの！

「氣の毒に……」

こら、聞こえてるぞ、ゼル！　その独り言！

「一体、なにがどうなってるんだよー、教えてくれよあ、リナあー」
ガウリイは、うるたえまくって半泣きになっている。

ふふん。ちょびつとだけ、いい気分。

「ガウリイ」

あたしは、今日一日、ヤな目にあってたまりにたまりまくってたウツプンを、このクラゲにぶつけるコトにした。

「愛してるわよあ、ガウリイ」

そして、極上の笑みを浮かべ、ウィンクしてやったのだった。

Bパート（後書き）

次回予告 九月二十四日より「結婚狂奏曲」をアップ予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9655w/>

これって呪い？ ゾアメルグスターの恐怖！

2011年9月25日03時28分発行